

▼ 聖ヨセフの働きに思う ▼

校長 阿南 孝也

ヴィアートル修道会は、ケルブ神父によって創立された教育修道会です。フランス革命後の混乱期、弱者である子どもたちが放置されている状況に心を痛めたケルブ神父は、青少年教育のために立ち上がりました。彼の始めた教育者グループは、1831年リオン教区司教に認可され、さらに1838年には、ローマ教皇からも修道会としての認可を受けることができました。こうしてヴィアートル修道会は、世界中に会員を派遣し青少年教育に携わることができるようになったのです。

ケルブ神父は“*Sinite parvulos venire ad me*”（ラテン語：子どもたちを私のところに来させなさい、）というキリストのみ言葉を会のモットーに選びました。イエスに触れていただきたくて乳飲み子を連れてきた人々を叱る弟子たちに対して、「子供たちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである」と言われた場面です。創立者のモットーは、洛星校舎の正面玄関壁面に、また生徒が登下校時に通用する1階ホールに安置されたケルブ胸像の台座にも記されています。

私はこの聖句を眺める度に、救い主のご降誕に当たり、神のみ心のままに幼子イエスを受け入れた聖ヨセフの働きに思いが及ぶのです。「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」、これはマタイ福音書の冒頭部分です。「アブラハムはイサクをもうけ、イサクは・・・」と、42代に及ぶ長い系図が続き、最後に「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった」と記されています。

「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を生む。その子をイエスと名付けなさい」。タブロー3幕でもおなじみの聖句です。この天使の言葉と婚約者マリアを信頼したヨセフは、天使が命じた通りに妻マリアを迎え入れました。マリアは聖霊によって懐妊し、イエスを産んだと聖書は伝えています。つまり、ヨセフとイエスには血の繋がりはなかったと記されているのです。しかし、ヨセフがイエスを子として迎え入れたことによって、イエスはダビデの子とされたのです。こうして、ダビデの子孫から救い主が誕生するという神の救いの計画が実現されたのです。

マリアへの受胎告知は有名です。でも私は、マリアの働きに加えて、天使から告げられた神のご意思に従ったヨセフの勇気と信仰に基づく行動が加わったことによって、救い主が誕生したと思っています。

現代に生きる私たちが神のご意思を確かめることは難しいことかもしれません。洛星で学ぶ子どもたちが、日々の真剣な学びの中で、将来進むべき道を探り、天職（“calling”“vocation”）を見つけてほしい、そう願っています。